反復継続と漸進の相

――シテイクとシテクルの考察――

大島中正

一　はじめに

標題に示したシテイクとシテクルとは共時的に見れば、動詞の第二なかどめと補助動詞イク・クルとが結合したすがた動詞のことである。[1]（以後簡略にシテイク・シテクル形式と呼ぶ）

しかし、通時的には『て』の下に下語動詞が付属したというよりは、上下動詞の連接形の中間に、『て』が要求されるようになった、と見るべきものである」（吉田金彦氏（一九七一）[2]）、傍点は吉田氏による）と考えられよう。例えば古くは『萬葉集』に次のような用例を見出すことができるのである。

(1)　……　ぬばたまの　夜は明け行きぬ〔昶去奴〕　ここだくも　思ふごとならぬ　隠り妻かも（萬、巻第一三、三三一二）

(2)　志賀の浦に　いざりする海人　明け来れば〔安気久礼婆〕　浦廻漕ぐらし　梶の音聞こゆ（萬、巻第一五、三六六四）

(3)　……　白雲も　い行きはばかり　時じくそ　雪は降りける　語り継ぎ言ひ継ぎ行かむ〔言継将往〕　富士の高嶺は（萬、巻第三、三一七）

(4)　葦原の　瑞穂の国に　手向すと　天降りましけむ　五百万　千万神の神代より　言ひ継ぎ来たる〔云続来在〕　神奈備の三諸の山は　春されば　春霞立ち　……（萬、巻第一三、三二二七）

形式的には同じく動詞の第二なかどめとイク・クルとが結合したものであっても、そのシテイク・シテクルの表すところが空間的移動であると考えられるものは、本稿での考察の対象から除外することにする。ところが、個々の実例にあたっていくと、その意味するところが空間的移動であるのかアスペクトであるのかを截然とは見分けがたい例も存在する。例えば次の(5)と(6)それぞれに見える「ふってくる」はどうであろうか。

(5)　海水を中心とする地表にある水は、ゆっくり蒸発し、約10日間ほど大気中にとどまったあと雨や雪となって地上に降ってきます。（科学と人

問　一七[13]

(6)　山々ははげしくゆれうごき、みるみるあたりはくらくなったかとおもうと、たきのような雨が、ざあっとふってきました。（龍の子太郎　三〇）

(5)には(6)と異なり「地上に」といった動き（「ふってくる」）の到着点を表す状況語[4]が明示されているため「ふってくる」が「降水状態の発生」を表していると言うよりもむしろ「水の大気中から地上への移動」を表していると言うべきかとも思えるが、アスペクチュアルな意味を全く表していないとも言いきれないであろう。疑問が残る。次の(7)から(10)の「はいってくる」についても同様の問題がある。

(7)　見ると、大きなへやの向こうのはしから、医師が、ひとりの助手を連れてはいってきました。[5]

(8)　外国から、新しい品物や考えなどといっしょにはいってきたことばがあります。[6]

(9)　さっきの村がようやく視野の端に入ってきた。だがそれは、彼女の目に絶望的な距離にうつった。（野性の証明　一三）

(10)　下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑と一しょに、心の中へはいって来た。（羅生門　一四）

(7)(8)の場合は前項動詞である「はいって」をとり除いて、「き（まし）た」だけにしても、(7)は「医師が……きました」となり、(8)は「外国から……きたことばがあります」となって意味が通じる。つまりこれらのクルは「医師」「ことば」といった移動の主体を示す成分と、単独で共起し得るのである。それに対して(9)(10)の方はどうであろうか。(9)は「村が……視野の端に……きた」、(10)は「憎悪が、……心の中へ……来た」となり、いずれのクルも「はいる」という動きの主体を示す「村が」「憎悪が」という成分とは単独で共起し得ないように思われる。このような観察に基づいて、或るシテイク・シテクル形式が次の①②の両条件を同時に満たせば、それは空間的移動を表すものであると判断するといった基準を設けた。

①　シテイク・シテクル形式で表される移動動作の到着点や出発点或いは通過点を示す状況語が明示されているか、もしくは比較的容易にそれらの成分を補い得ること。

②　シテイク・シテクル形式の前項動詞を除外しても、イクまたはクルがそれぞれ単独で、移動動作の主体を表す成分と共起し得ること。

このような基準をもって(5)(6)それぞれを見ると、(5)は条件①を満たすが②は満たさず、(6)は条件①②のいずれにも合わず、ともに空間的移動を表すと言うよりはアスペクトを表す例であると考えるべきであると思われる。しかしこのような基準には多分に曖昧さがあり、あくまでも一応の目安にすぎないことを付言しておかねばなるまい。実際には中間的な性格のものの存在することを認めざるを得ないであろう。

本稿では「アスペクト」という用語を「動詞の表す動作・作用の

全過程のどの部分に焦点を置いて、動作・作用を把握・表現するかの違い」（『日本文法事典』一一四頁、仁田義雄氏執筆の「相（アスペクト）」の項からの抄出）と理解して用いており、シテイク・シテクル形式にもそれを表す場合があると考える。しかし、スル、シテイル、シテアルのような一次的、基本的な形式に比べてシテイク・シテクル形式は二次的、副次的なものとして認識するべきであろう。その理由は次の三点に求められよう。

① 空間的移動を意味するものとアスペクトを表すものとの間に必ずしも明確な一線を画することはできず、両者間には連続性があると考えられること。

② 鈴木康之氏（一九七七）[7]が述べておられるように、シテイク・シテクルにはシテイッテイル・シテキテイルといった形式があって、スルとシテイルといったより基本的なアスペクトのシステムをつくっている形式の対立関係がそこに見られること。

③ 次の用例(11)の「ふえた」を「ふえていった」或いは「ふえてきた」とすることも十分に可能であると考えられるが、そこは単に「ふえた」となっている。このことはシテイク・シテクルという形式が必ずしも義務的なものではないことを示しているものと考えられる。

(11) ……、年貢の増徴策は農民の生活を圧迫し、百姓一揆がしだいにふえた。（詳説日本史　一八六）

現代日本語の動詞のアスペクチュアルな意味を表す諸形式の中で二次的なものとして位置づけられるシテイク・シテクル形式の意味を分析するにあたってはシテイク形式のような一次的なものとの比較を行い、両者の関連性をも考慮に入れるべきであろう。また分析の方法についても盛んに論じられているシテイク形式についての分析方法を参考にするべきであると思われる。

このシテイク・シテクル形式については、森田良行氏（一九六八a・b）[8]、高橋太郎氏（一九六九）[9]、吉田金彦氏（一九七一）[10]、吉川武時氏（一九七一）[11]、鈴木重幸氏（一九七二）[12]、三上勝夫氏（一九七五）[13]、牧内勝氏（一九七九）[14]等によって、多くの実例に基づく詳細な研究がなされてきた。しかし、その表す意味の分類および各類型（筆者は後述のごとく二類型に大別するのであるが）におけるイクとクルの共通点、相違点に関して（特にシテクル形式に関して）はなお再考の余地があるように思われる。以下、類型Ⅰ・類型Ⅱに二大別し、各類型のシテイク・シテクル形式の①前項動詞に着目し共通して見出される語彙的な意味を考え、②シテイク・シテクル形式を含む述語とそれ以外の文の成分との共起関係に注目し、③二つの類型間に生じる意味の相互移行現象について順次考察を加えていく。

なお、本稿では文学作品ならびに歴史的な記述の比較的に多く見られる文献から実例を採集し、作例による考察は極力避けるという方針をとった。

二　シテイク・シテクル形式の意味

二・〇　反復継続相と漸進相

筆者は、シテイク・シテクル形式それぞれが表すアスペクチュアルな意味は基本的には二大別できるものであると考える。その一つは「反復継続相」とでも言うべきものであり、もう一つは「漸進相」である。前者は、或る基準となる時点から或いは逆に或る基準となる時点まで、或る主体が時間の推移に沿って或る一定の動きを反復することもしくは或る一定の状態にあることを表すものである。後者は、或る無意志性の主体そのものが時間の推移とともに或る一定の状態に向かって漸進することを表すものである。

これら二つの類型の意味上の差異は直接には前項成分である動詞の語彙的な意味によって生じるのではなく、前項成分である動詞と後項成分である補助動詞イク・クルとの成分相互の意味関係の差によるものと考える。また補助動詞イク・クルはいずれの類型においても「或る時点から別の或る時点までの或る動きの主体の推移」を意味しているのであって、反復継続相を表すシテイクのイクと漸進相を表すシテイクのイクの意味が異なるとか、反復継続相のシテクルのクルと漸進相のそれとの間に意味上の差異が認められるなどとは考えられないと思う。以下、類型ごとに実例を挙げつつ考察を加える。

二・一　反復継続相

反復継続相を表すシテイク・シテクル形式の用例として次のようなものが挙げられる。

(12)　……わたしたちの祖先は、やがて米作りをとりいれ、むらをつくり、しだいに日本を一つの国にまとめていきました。（新しい社会、6上、四一）

(13)　そして、尾崎行雄や犬養毅らを中心にして、しだいに多くの国民がこの運動に加わっていきました。（新しい社会、6上、一三二）

(14)　ぼくら母子は、ぼくのサラリーでなんとかやって行きますからご安心ください。（寒い夜　三二二）

(15)　あれはいつまでもあなたと一緒に苦労していける女なんかじゃありません。（寒い夜　一六一）

(16)　「なんとかすると言っても、わたしは死ぬまでなんともできないと思いますよ。一昨年は去年になればよくなると言い、去年は今年になればよくなると言って来た。それじゃ今年は何と言ったらいいんです？年ごとに悪くなる一方じゃありませんか」（寒い夜　二〇一）

(17)　彼の筆は大げさに大臣や次官や代議士たちの行動を、論評したり酷評したり賞讃したりして来たけれども、政治家たちと古垣常太郎とのあいだには、何年たっても少しも変らない、大きな格差があった。（金環蝕　三〇〇）

(18)　案内されて梵寺の本堂の横手の一室にはいって行った普照が最初眼にしたものは、これまでいつも見て来たと全く同じ業行の机に対っている貧相な背後姿であった。（天平の甍　九〇）

(19)　それまでも律令の条文を補足・改正するための格や、業務の施行細則を定めた式はおりにふれて数多くだされてきたが、これらを分類整理して実務の便をはかるために、弘仁・貞観・延喜の三代格式がつぎつぎと編集された。（詳説日本史　五九～六〇）

(20)　古くからいろいろな学校が建てられてきて、学問の都と言われることもあります。（京都・大阪とその周辺　一）

(21)　このような儀式の整備は、法典や国史の編集とともに、中国で国家の文化的事業として重視されてきたところであった。（詳説日本史　六一）

(22)　祇園から清水へと向かう道は、昔から人々に愛されてきました。（京都・大阪とその周辺　四）

(12)から(15)はシテイク形式の、(16)から(22)はシテクル形式の用例である。まず補助動詞の語形について観察するとイクについてはイクもイッタも見られるがクルについてはキタのみでクルが見られないということが分かる。このことはシテクル形式によっては「現在から未来へ」または「未来から未来へ」の反復継続が表されることはないということを意味する。[15] この点は漸進相を表すシテクル形式と異なる点の一つである。

この類型Ⅰは、或る基準となる時点から、或いは或る基準となる時点まで（その時点も個々に比べれば長短があるが、それは問題にならない。またその時点を示す状況語が必ずしも文中に明示されているわけではない。）、或る主体（意志性の有無は関係がない。同一の動きをする複数の主体である場合もある。例えば(13)の「多くの国民」(19)の「式」(20)の「いろいろな学校」。）が時間の推移に沿って一定の動きを反復すること或いは一定の状態を継続させることを表すものである。(17)には複数の動き（「論評したり酷評したり賞讃したりする」）が示されているが、それらには「批評を加える」とでも言うべき共通点があるので「一定の動き」という規定に適合するものであると考えられる。また、動きの反復が行われる時点と時点との隔たりにも粗密があろうが、それも問う必要のないことと考える。しかし、次の(23)のような例はどうであろうか。

(23)　……入口に近い所にも同じような黒い石が立っています。それは大将軍より少し低く小さいので人々はこれを副将軍と呼んでいます。大将軍と副将軍はここに何年立って来たのでしょうか。（北京の伝説　二三九）

これは「大将軍、副将軍と呼ばれる石」が主体で、「（それらは）ここに何年あって（或いは「いて」）来たのでしょうか。」とでも表現したいところであろう。しかし現代日本語のアスペクトを表すシテイク・シテクル形式の前項動詞には「ある、いる」といった存在を表す状態動詞は用いられないのである。ただし古く『萬葉集』には次の(24)のように「ありく」の用例が見られる。

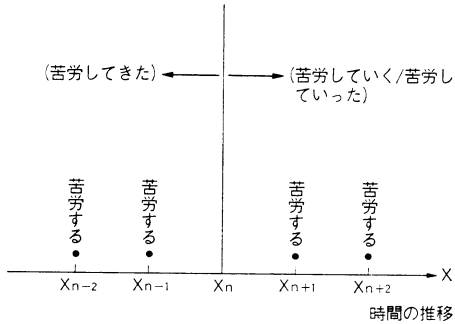
(24)　……　高き立山　冬夏と　別くこともなく　白たへに　雪は降り置きて　古ゆ　あり来にければ〔阿里吉仁家礼婆〕　こごしかも　岩の神さび　たまきはる　幾代経にけむ　……（萬、巻第一七、四〇〇三）

(23)のような用例のあることをも考慮して「一定の状態を継続させる

こと」を付け加えたのである。しかし、これとても反復の行われる間隔の最も密なる場合と考えれば、これを「一定の動きの反復」の延長線上に位置づけることにさして問題はなかろうと思われる。

類型Ⅰを視覚的に図示してみると次の図1のようになる。時間の推移を示すX軸の上にある点X_nが基準となる時点（話し手によって選ばれ、視点がすえられ、中心性が与えられる時点）[16]であり、X_{n-2}或いはそれ以前の時点からX_nまでの間における反復をX_nから捉えて表すにはシテキタが用いられ、X_nからそれ以後の時間における反復を同じくX_nから捉えればシテイク形式（すなわち、シテイクまたはシテイッタ）が用いられるのである。X_nを「今」とし、X_nの前後の時間における或る動きの反復を同時に捉えるならば「今（毎日）苦労しています」という風にシテイル形式で「現在の習慣」[17]を表すことができる。

図　1



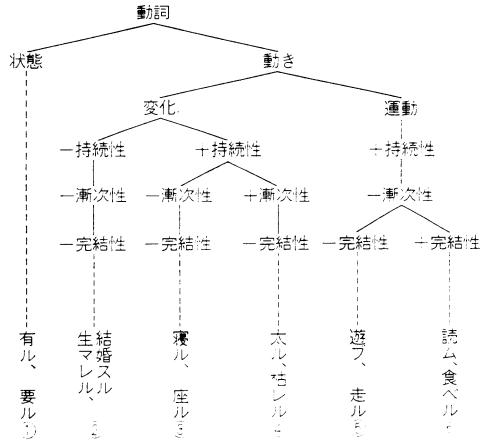
次の㉕㉖に見えるシテキテイルという形式は、類型Ⅰのシテキタの意味するところと大差のないものと思われる。

㉕ 怖るべきことだが、芸を決するのは努力もさることながら根本は才能であった。それを玉次郎も彼の三十年余の経験で嫌と思うほど見てきている。（人形浄瑠璃　一五〇）

㉖ だいたい、なにを言おうと祥子は素直に聞きいれ口返答ひとつしない。これがほかの連中だと、さんざん苦労をしてきているから、なにかといえばふてくされてみせる。（駱駝祥子　六〇）

さて、類型Ⅰのシテイク・シテクル形式の前項動詞にはどのような共通性が認められるのであろうか。仁田義雄氏（一九八二）[18]は各々の動詞グループが範疇的意義をどのように分有しあい、グループごとがどのような相互関係にあるかを図2のように示された。氏の分類に従って類型Ⅰの前項動詞を観察すると、〔運動〕の動詞（図2中の⑤⑥）と漸次性を有さない〔変化〕の動詞（図2中の②③）に属するものが多く見られる。「結婚する、入学する、寝る、座る」のような意志性のある〔変化〕の動詞は類型Ⅰの前項動詞となり、同じ〔変化〕の動詞でも漸次性を有するものは類型Ⅱの前項動詞になるということが基本的には認められよう。また「着る、履く、脱ぐ」のような再帰動詞[19]も類型Ⅰの前項動詞になる。「ある、いる」

図　2



仁田義雄「動詞の意味と構文――テンス・アスペクトをめぐって――」（『日本語学』第1巻第1号所収）より転載

のような〔状態〕の動詞が少なくとも現代日本語においてはシテイク・シテクル形式の前項動詞たり得ぬこと、先に見た通りである。

これらの動詞（図2中の②③⑤⑥）とイク・クルとが「前項動詞の表す動きを反復しつつ（或る時点から）イク・（或る時点まで）クル」といった意味関係で結合して、反復継続相というアスペクトを表しているものと考えられる。

二・二　漸進相

漸進相を表すシテイク・シテクル形式の用例としては次のようなものが挙げられる。

(27) 狩猟・漁撈・採集の生活から農耕の生活へと進むことは、歴史の展開のうえで大きなできごとである。日本では紀元前3世紀ころから、その動きが急速に進んでいった。（詳説日本史　一六）

(28) ……、秋に霊薬はまた種をつけました。こうして霊薬は一年一年とふえていきました。（北京の伝説　八〇）

(29) 業行の声は次第に低く呟くような調子に変って行った。普照は聞耳を立てたが、僅かに「伎楽」「舎利」そして「香水」といった言葉が聞きとれたぐらいで、そのあとは何を言っているか全く判らなかった。（天平の甍　一五四～一五五）

(30) 私は、このごろ、少しずつ、太って行きます。動物的な女になってゆくというよりは、ひとらしくなったのだと思っています。（斜陽　八二）

(31) しかしその不正行為の大部分は、まるで当然のことでもあるかのように、人々に噂されただけで、時のたつと共に消え去って行く。（金環蝕　一五一）

(32) そして参吉自身は自分の事務室のなかで、次第に資料がふえて行くのをたのしみながら、独り腹の中でにやにやしているのだった。（金環蝕　二〇五）

(33) 次第に更けて行く朧夜に、沈黙の人二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべって行った。（高瀬舟　二二八）

(34) 「妾この頃だんだん神と云うものがあるような気がしてきましたわ」（友情　八二）

(35) 谷間は時間にしては、薄暗くなった。急に冷えても来た。（古都　二二〇）

(36) こうした普照の考えは栄叡の歿後、約半歳の間に彼の心の中で徐々に

固まって来たものであるが、併し、これを決定的なものとしたのは、韶州で三つの寺を転々としている間に、鑒真の視力が急速に衰えて来たことであった。（天平の甍　一一七）

(37) 弟の目は恐ろしい催促を罷めません。それにその目の怨めしそうなのが段段険しくなって来て、とうとう敵の顔でも睨むような、憎々しい目になってしまいます。（高瀬舟　二一六）

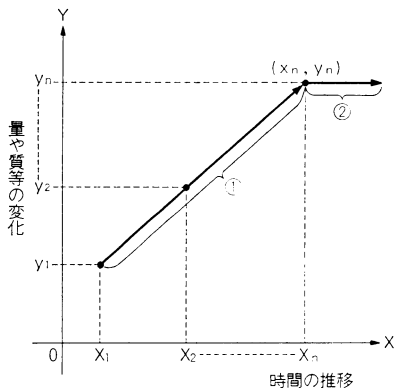
(38) 普照が立ち去ったあと、鑒真は日一日眼光が薄れ、物象が次第にぼんやりして来る一方だったので、周囲の者の勧めもあって、眼をよく治すという胡人の療治を受けた。（天平の甍　一二〇）

(39) 「私、お姉さんに会ったことある」
「あら、この間もそんなことを言ったわね」
「お姉さんの顔がだんだんはっきりしてくるの」（野性の証明　一六七）

(27)から(33)はシテイク形式の、(34)から(39)はシテクル形式の用例である。シテクル形式においてはキタのみならずクルの用いられている点が類型Ⅰとの相違点の一つである。これは「現在から未来へ」または「未来から未来へ」の漸進はイクのみならずクルによっても表し得ることを意味しており、次節で扱う「状態発生相」ならびに「状態消滅将然相」とも関連するところである。

類型Ⅱのシテイク・シテクル形式の表すところを図示すれば図3のようになるであろう。この図の横軸は「時間の推移」を表し、時間はx_1からx_nの方向に推移するとする。一方、縦軸は各時点における無意志性主体の量や質等の変化を表している。矢印①はシテイク・シテクル形式全体が意味する「変化の過程」を表している。この変化には時点x_nにおけるy_nという「一定の到達段階」があり、そこに向かって無意志性主体の状態の変化が累積的に漸進するのである。（x_n、y_n）から後の横軸に平行な矢印②はその変化が（x_n、y_n）という一定の段階に至り、その状態が持続しているということを表しているもので、それはシテイル形式で表されるのである。x_1からx_2へx_{n-1}からx_nへといったそれぞれの時間の間隔は(38)のように「一日」であったり、(28)のように「一年」であったりする。またx_1からx_nまでの長さも当然のことながらさまざまであるが、いずれにおいてもこの図が示しているような変化の過程を表していることに違いはない。矢印①、座標（x_n、y_n）、矢印②のそれぞれは、(29)を例にして言うならばそれぞれ「変って行く」「変った」「変っている」といった形式で表され得るものである。矢

図　3



印①の傾きについて見ると「段々、次第に、徐々に」といった修飾語と共起する場合には比較的に緩やかであり、(35)のように「急に」といった修飾語の見える場合には、矢印の傾きも急になり、y_1からy_nへの変化に要するx_1からx_nまでの時間が非常に短くなるというわけである。

類型Ⅱのシテイク・シテクル形式の前項成分となる動詞は先の仁田氏の分類で言うと漸次性を有する〔変化〕の動詞が中心であると言えよう。図2の中の④の動詞グループである。このような動詞と後項成分である補助動詞のイク・クルが「前項動詞が表す一定の状態y_nに到達する時点であるx_nに向かってイク・クル」といった意味関係で結合して漸進相というアスペクトを表していると考えられる。

二・三　状態発生相と状態消滅将然相

類型Ⅱにおけるシテイク形式とシテクル形式にはどのような相違点があるのであろうか。ここではシテクル形式を中心に、その前項動詞や述語以外の文の成分との共起関係についての観察を行った上でシテイク形式では表し得ない二つのアスペクチュアルな意味すなわち「状態発生相」と「状態消滅将然相」とに言及し、これら二つのアスペクトと漸進相との関連に目を向けようと思う。

前節で漸進相を表すシテクル形式の用例として掲げたもののうち、(34)(38)(39)の三例に注目してみると、いずれも「だんだん、次第に」といった漸次変化を表す修飾語が明示されており、漸進相を表すシテクル形式の適例である。そこでこれらの前項動詞に目を向けると、(34)「気がする」(38)「ぼんやりする」(39)「はっきりする」が見出され、これらの動詞には意味の上から見ても、文法的な側面から見ても共通点のあることが分かる。森田良行氏（一九六八a）[28]は「発生を表す『てくる』」という項で「(思いが)あふれて〜、現われて〜、(考えが)浮かんで〜、(気持ちが)起こって〜、(考えが)出て〜、(痛みが)押しよせて〜、(眠けが)襲って〜、(頭に)こたえて〜」等の動詞を挙げ「心理的・感覚的現象が、話し手を中心に我々の側――そのような感情感覚を覚える人間の側――へと出現するのであるから、テクルのみを用い、テイクの用法をもたない」と述べておられる。「気がする、ぼんやりする、はっきりする」は生理的・心理的な感覚を表すという意味上の共通点を有しているため、森田氏の示された動詞グループの中に含まれ「状態発生相」というアスペクトを表す前項動詞ともなり得るであろう。しかし、ここで見落とせないことは、これらの動詞が「だんだん、次第に」等の漸次変化を表す修飾語と共起して漸進相を表すシテクル形式の前項成分にもなり得る点である。しかもこれらの動詞は「状態発生相」を表す場合に限らず「漸進相」を表す場合でもシテクル形式の前項成分となるばかりで、シテイク形式の前項成分とはならないのである。この

種の動詞の中には擬態語をその構成要素にもつものが多く見出される。筆者が採集し得たものを示すと次のようになる。[21]

いきいきする、いらいらする、いらだつ、うとうとする、かさかさする、がたがたする、がたびしする、かっかする、ぐらつく、しっかりする、しとしとする、じめじめする、ぞくぞくする、ぞくっとする、そわそわする、ちかちかする、つんとする、とろんとする、ぬらぬらする、ねとねとする、ねばねばする、ぶわぶわする、へどもどする、ほかほかする、ぽっぽする、ぼんやりする、むかむかする、むしゃくしゃする、むずむずする、むらむらする、もやもやする、わくわくする

このほかにもシテクル形式の前項動詞にしかならないものとして「泣ける、笑える、思える、寒気がする」等を挙げることができるが、擬態語を構成要素にもつものはその量的な多さから言っても注目すべきであろう。さらに文法的な側面に目を向けても「頭ガガンガンスル。」も「頭ガガンガンシテイル。」もともに現在を表しアスペクト的対立を成していないという指摘[22]があるように他の〔動き〕の動詞（図2中の②～⑥）とは異なる性格をもっているのである。

次の(40)から(43)にはいずれもシテクル形式が用いられているが、これらは共起している時を表す状況語から見て、きわめて短い時間、或いは瞬間における無意志性主体の状態の変化を表していると言えよう。図3の矢印①がY軸にほとんど重なっているような状態変化である。

(40)「寒いんじゃないわ。白粉を落したからよ。私は寝床に入ると直ぐ、足の先までぽっぽして来るの。」（雪国　四一）

(41)それから、三分か四分かした時、また喉がむずむずしてきた。（寒い夜　二四三）

(42)そのとき、ズシーン、ズシーン、と、地ひびきがしてきました。（龍の子太郎　八六）

(43)七時すぎ、親方は眠くなってきたが、弱みを見せまいとして、がんばっていた。（駱駝祥子　二二二）

このようなシテクル形式を「漸進相」から区別しようと思えば「状態発生相」を表すものとでも言えよう。しかしその一方で類型Ⅰの「反復継続相」を表すものと比較すれば「漸進相」との連続性に注目すべきである。筆者は類型Ⅱの中に「漸進相」と「状態発生相」とを認め、一定の構文的条件の下で（例えば漸次変化を示す修飾語があるとか、瞬時を示す状況語があるといった条件の下で）いずれかに意味が明瞭化するものと考える。

「動く、（風が）吹く、降る」といった動詞は〔変化〕の動詞ではなく、先の仁田氏の分類に従えば完結性のない〔運動〕の動詞（図2中の⑤）に属するものであると言えよう。これらの動詞は用例(6)や次の(44)に見えるようにシテクル形式の前項動詞となって状態発生相というアスペクトを表すことがある。

(44)すると突然ヒューと一陣の風が吹いて来て小僧さんを大空に吹きあげ

ました。（北京の伝説　一四二）

ところが、この種の動詞が前項成分になっているシテクル形式も次の(45)(46)のように「少しずつ、次第に」といった修飾語と共起することがあり、漸新相を表す用例として示し得るものとなるのである。

(45)　鐘を動かすとき摩擦力は意外に小さく、鐘の持つ独自の振動数に合わせて周期的に押すとはじめはなかなか動き出したように見えませんが、気長に力を加えつづけていると、少しずつ動いてくるのがわかります。（科学と人間　六七）

(46)　雪は次第に降って來た。（越後の冬　二八九）

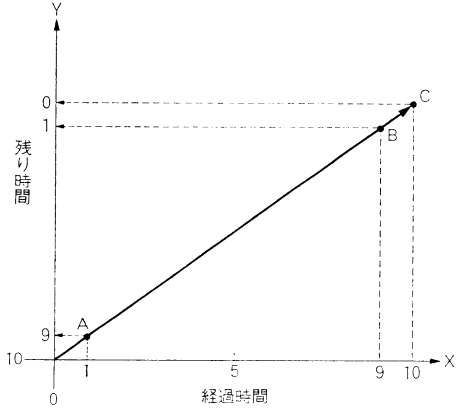
さて、「動く、吹く、降る」の反義語である「止まる、凪ぐ、やむ」がシテクル形式の前項成分となる場合はどのようなアスペクトを表すのであろうか。これらの動詞はそれまで持続していたある状態が消滅してしまうことを意味するという共通点を有するので「消滅動詞」と呼ぶことができる。「なくなる、消える、尽きる、（ガソリン等が）きれる」等も消滅動詞と言えよう。

(47)　……、本当はこれから佳境に入るという感じですが、時間もそろそろなくなってきましたので、……（月刊国語教育　一九八四年一一月号　四八）

(48)　……、また貿易も、明治初年以来、輸入超過がつづいたため、正貨保有高は底をついてきた。（詳説日本史　二五六）

「なくなってきた」というのも「底をついてきた」というのも「なくなった」とか「底をついた」という一定の段階にはまだ達していないが「なくなる」寸前、「底をつく」寸前の状態に至っていることを表している。(47)の「そろそろ」は「間もなくある状態になる、またはある状態が起こるようすをいう表現」という記述が『擬声語・擬態語辞典』（浅野鶴子編・角川小辞典12）に見える。例えば何かの持ち時間が十分であるとして、(47)のような「時間がなくなってきましたので云々」などといった発言は、残り時間があとわずか（例えば一、二分）であるという状況の下で聞かれるものである。図4の座標Bの状態でこのような発言がなされるのであって、決して座標Aのような状態ではなされないと言えよう。座標Cは「時間がなくなった」という一定の到達段階を示している。このようなシテクル形式で表されるアスペクトを筆者は「状態消滅将然

図　4



相」と名づけようと思う。この状態消滅将然相も次の(49)のように「だんだん」といった漸次変化を示す修飾語と共起することによってその表す意味が漸進相へと移行するのである。

(49) 北野は、本部きっての辣腕と謳われる佐竹の眼光に射すくめられて、だんだん自信を失ってきた。（野性の証明　三〇）

したがって状態消滅将然相も状態発生相と同様類型Ⅱの変種と位置づけることができよう。

以上の考察を踏まえて本節冒頭で提起した「類型Ⅱにおけるシテイク形式とシテクル形式にはどのような相違点があるのか」という問題を検討してみよう。シテイク形式は漸進相のみを表し、シテクル形式は漸進相のみならず状態発生相および状態消滅将然相をも表す。類型Ⅱは既に図3・図4でも示したように「或る一定の到達段階とでも言うべき状態」があってそこに向かっての無意性主体の状態の変化を表すものである。それはシテイク形式にもシテクル形式にもあてはまることである。しかし、同一の変化現象、例えば「持ち時間がなくなる」であっても「なくなってくる・なくなってきた」であれば「話し手が中心性を与える時点」が「経過時間が持ち時間一ぱいになった時点」にあると考えられる。一方「なくなっていく・なくなっていった」であれば、図4の座標（0、10）から座標A、Bを通り、さらにCへと向かう全過程に焦点を合わせて、その変化が捉えられていると考えられる。また状態発生相においても「話し手が中心性を与えている時点」が「或る一定の到達段階とでも言うべき状態に至った時点」であることは言うまでもなかろう。このような補助動詞イクとクルとの違いは「のぼる」と「あがる」の違い[23]に通じるものと考えられよう。したがって、「だんだん、次第に、徐々に」といった漸次変化を示す修飾語はシテイク・シテクル両形式と共起するものではあるが、シテイク形式と共起するそれらとシテクル形式と共起する、それらの間にはその価値に差があると考える。シテイク形式と共起するそれらはシテイク形式が表す漸進相を強調しているにすぎないが[24]、シテクル形式と共起するそれらはシテクル形式が表すアスペクチュアルな意味に状態発生相または状態消滅将然相から漸進相へという変更をもたらす構文的な条件になるものと考えるわけである。シテクル形式を漸進相を表すものへと変えるものとしては、漸次変化を示す修飾語のほかに一次的アスペクトである「シテイル」がある。

(50) もう渇れてきていると思っていた自分のいのちが、春都代の肉体から精気を吸い、墨絵の着物になって、舞台一杯に大きく舞い舞っていたのを、幸吉は彼自身のために忘れることができないのであった。（墨　九〇）

(51) 「おふくろは年を取って頑固になってきているんだ。堪えてやってくれ」（寒い夜　二〇二）

類型Ⅰのシテキテイルとシテキタとの間に意味上大差のないこと二・二で述べた通りであるが、類型Ⅱのそれらの間には差異が認められる。(50)の「渇れてきている」は「渇れつつある」に(51)の「頑固になってきている」は「頑固になりつつある」とそれぞれ言い換えができる。つまり類型Ⅱのシテキテイルはシツツアルに置き換え得るもので、置き換えの可能な両者は或る主体が或る変化の途中にあることを意味しているのである。

二・四　意味の相互移行

前節では類型Ⅱのシテクル形式について、意味の移行という現象があることを認め、そこからシテイク形式とシテクル形式との違いにも言及した。本節では、類型Ⅰと類型Ⅱとの間に見られる意味の相互移行について見ることにする。

まず、本来類型Ⅰの反復継続相を表し得るシテイク・シテクル形式が或る一定の構文的条件の下では類型Ⅱの漸進相を表すようになるという場合を見る。

(52)　……、栽培技術や農業知識が広まった。こうして生産力はいちだんと高まっていった。(詳説日本史　一八七)

(53)　……、そこで生産された干鰯は、速効性の肥料として木綿・野菜などの栽培に用いられ、いっそう生産力を高めていった。(詳説日本史　一八八)

(54)　彼女は良人を待ちながら十七年を暮した。それから今度は息子だ。待つということの永い永い習慣が、彼女の性格をかたちづくって来たのかも知れない。(青春の蹉跌　一五)

(52)は漸進相を表すシテイク形式の例であるが、(53)(54)はどうであろうか。(53)(54)それぞれの主語「干鰯は」、「習慣が」はいずれも意志的な動きの主体を表していない。これらの主語を「干鰯(が速効性の肥料として木綿・野菜などの栽培に用いられること)によって」、「習慣によって」という原因を表す状況語に置き換えると、それぞれの後続部分は「生産力が高まっていった」、「彼女の性格がかたちづくられて来たのかも知れない」となる。主語を原因を表す状況語に言い換えても文意に差異は生じていない。(53)では「生産力が高まる」という変化を(54)では「彼女の性格がかたちづくられる」という変化をシテイク・シテクル形式で表していることになる。このように主語が無意志性のもので述語の表す事柄の原因を表しているような場合は、シテイク・シテクル形式の表す意味が反復継続相から漸進相へと移行する。なお、このような構文的条件は、シテイル形式において動き動詞(仁田氏の言われる〔運動〕の動詞にあたる)が「変化の結果の継続」を表すようになる条件でもある。[55]

(55)　平安時代にはじまった祇園会は、はじめ鉾の力で災疫をのぞくためのものであったが、華美な作り物にかざられた山がつけ加えられ、しだいに祇園社の神事から祭りへとその性格をかえていった。(詳説日本史　一一四)

(56) 彼女があちこちに吹聴したらしく、味沢の許へペットを預けに来る者が増えてきた。中には留守時預けるだけでなく、運動の散歩まで彼に頼む者が出てきた。
だがそのおかげで彼は徐々に成績を上げていったのである。（野性の証明　四七～四八）

(57) 中沢証券が立ち直るとすれば、危機を予想されていた投資信託もその安全性をとり戻して来るのだろう。（金環蝕　一八）

「かえていった」、「上げていったのである」、「とり戻して来るだろう」という述語のそれぞれの主語は「祇園会は」、「彼は」、「投資信託も」であり、それらはそれぞれの述語が表す動きの主体である。ところが、それぞれの動きの主体自身に属するところの「その性格」、「成績」、「その安全性」をそれぞれ「かえ」、「上げ」、「とり戻す」のであるから、結局はそれらの動きの主体である「祇園会」、「彼」、「投資信託」の状態が変化することになるのである。このような一種の再帰的な意味構造の文で、しかもその動きの主体が無意志性のものである場合にも類型Ⅰから類型Ⅱへの意味の移行が生じると考えられる。(56)の「彼」が無意志性であるということは、「そのおかげで」という状況語によって判断できる。この文は「それが徐々に彼の成績を上げていったのである」と言い換えることもできる。例えば「あらゆる手をつくして私は自分の成績を上げていくつもりです。」という文があるとすると、そこに再帰的な意味構造が認められるとしても、その意志性からこの「上げていく」は類型Ⅰのものと判断する。またこの「上げていく」を「上げてくる」としたのでは文として成り立たない。そういう事実によっても類型Ⅰであると判断することの妥当性が認められよう。

では次に本来類型Ⅱのシテイク・シテクル形式であると考えられるものがどのような構文的条件の下でその意味を類型Ⅰの反復継続相に移行させるのかを見ることにする。

(58) 恐怖の背後にすくんでいた生来の残忍性が、安全圏に逃げ込んで頭をもたげてきたのである。（野性の証明　四七三）

(59) 普照の心には、計画が蹉跌する毎に鑒真を日本へ招ずるということに対する疑惑の念が頭を擡げて来たが、いつも栄叡の不屈な闘志に押し切られていた形であった。（天平の甍　一一一）

(60) 朋子の気配にただならぬものを感じた浦川は姿勢を改めて原稿に目を落とした。読み進むうちに浦川の顔色が変ってきた。（野性の証明　一七六）

(61) その構造の枠組のなかで、時代と共に変ってきた日本文学の歴史は、秩序だてて叙述されるにちがいない。（日本文学史序説、上　六）

(58)(59)には「もたげてきた」が(60)(61)には「変ってきた」が見える。いずれも或る主体の変化を表していると言ってしまえばそれまでだが、いわば(58)(60)は「累積的な変化の継続」を表し、(59)(61)の方は「一回的な変化の反復」を表していると言えよう。前者は類型Ⅱで後者はシテクル形式の意味が類型Ⅱから類型Ⅰへと移行したものと考える。

過去の或る時点で「(頭を)擡げていく(または擡げてくる)」、「変っていく(または変ってくる)」といった類型Ⅱのシテイク・シテクル形式で表され得るような変化が生じ、またその次の或る時点で同じ変化が生じといった具合に同一の変化が反復して或る基準となる時点にキタというのが、(59)の「擡げて来た」、(61)の「変ってきた」である。(59)に「計画が蹉跌する毎に」という成分が見えるが、このように「～する毎(或いは度)にいつも」という成分が共起するか、文脈からそのような成分を補い得るような場合に、本来類型Ⅱを表すシテイク・シテクル形式が類型Ⅰの反復継続相というアスペクトを表すようになるのである。

なお、極力作例を避けるという方針をとったためにシテイク形式における類型Ⅱから類型Ⅰへの意味の移行の認められる実例を示すことはできなかった。

三　まとめ

以上、アスペクトを表すシテイク・シテクル形式をめぐって考察を加えてきたが、最後に小論の要約をしておこう。

① アスペクトを表すシテイク・シテクル形式はいずれも反復継続相(類型Ⅰ)、漸進相(類型Ⅱ)という二種類のアスペクトを表す。

② 類型Ⅰのシテイク・シテクル形式は「前項動詞の意味する動きを反復しながら(基準となる時点から)イク・(基準となる時点まで)クル」という意味関係で前項動詞と補助動詞イク・クルとが結合している。他方、類型Ⅱのシテイク・シテクル形式は「前項動詞の意味する状態変化の生じる時点に漸進的に向かってイク・クル」という意味関係で前項動詞と補助動詞イク・クルとが結合している。いずれの類型においてもイク・クルが意味するところは或る動きの主体の或る時点から別の或る時点への推移である。

③ 類型Ⅱのシテクル形式は状態発生相ならびに状態消滅将然相というアスペクトを表すことがある。前者の前項動詞として生理的・心理的感覚を表す動詞が見られるが、その中には擬態語を構成要素にもつものが多く見られる。一方、後者のシテクル形式の前項動詞は消滅動詞に限られることは言うまでもない。

④ 類型Ⅱにおけるシテイク形式とシテクル形式の違いは、消滅将然相を表すシテクル形式(例えば「なくなってくる」)と、同じ消滅動詞を前項にもつシテイク形式(例えば「なくなっていく」)とをそれぞれの意味するところに目を着けて比較すると比較的容易に理解されよう。また状態発生相または状態消滅将然相を表すシテクル形式に「だんだん、次第に」等の漸次変化を示す修飾語が共起すると漸進相を表すという事実から同じ漸進相を表すものでもシテイク形式は「変化の過程」そのものに焦点を合わせて状態変化を表現するのに用いられ、シテクル形式は「状態変化の結果」に焦点を合わせて状態変化を表現するのに用いられるという両者の相違点についての説明を試みることができよう。

⑤ 類型Ⅰのシテイク・シテクル形式と類型Ⅱのそれらとの間には或る一定の構文的条件の下でその意味の相互移行が見られる。類型Ⅰから類型Ⅱへのそれは、(i)その動きの主体が無意志性のものでその主体を示す主語を原因を表す状況語に言い換え得る場合、または(ii)無意志性主体の或る動きがその主体の属性に何らかの変化をもたらすといった再帰的な意味構造の文である場合に生じる。類型Ⅱから類型Ⅰへのそれは前項動詞

の表す変化が累積的なものでなく一回的なものであると判断できるような構文的条件、例えば「～する毎にいつも」のような成分がシテイク・シテクル形式と共起する場合に生じる。

四　おわりに

以上、共時的な観点からの分析ならびに考察を行ってきたわけであるが、通時的に観察を行った場合、反復継続相と漸進相の両者の形成の過程と成立にはいかなる相違が見られるのであろうか。ことに類型Ⅱの漸進相を表すシテイク形式とシテクル形式との本質的な相違については、通時的な用例調査に基づく分析の裏書きが求められよう。通時的な考察によって反復継続相と漸進相との本質的な相違点を明らかにすることを今後の課題としたい。

注

① 「第二なかどめ、すがた動詞」という用語は参考文献(3)による。
② 参考文献(4)、五五頁。
③ 用例文の出典は、作品名、頁の順に示す。また引例に際しては原文中のルビを全て省略した。
④ 本稿で用いる「主語、述語、状況語、修飾語」という文の成分に関する用語は参考文献(6)による。
⑤ 参考文献(5)より借用した。
⑥ 同右。
⑦ 参考文献(9)、七七頁。
⑧ 参考文献(1)・(2)。
⑨ 参考文献(3)。
⑩ 参考文献(4)。
⑪ 参考文献(5)。
⑫ 参考文献(6)。
⑬ 参考文献(8)。
⑭ 参考文献(11)。
⑮ 参考文献(11)に詳しく論じられている。
⑯ 参考文献(10)に空間移動のイク・クルについて論じられていることをアスペクトを表すシテイク・シテクル形式の補助動詞イク・クルに適用してみた。
⑰ 寺村秀夫（一九八四）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版、一二八頁～一三〇頁。
⑱ 参考文献(13)。
⑲ 仁田義雄（一九八二）「再帰動詞、再帰用法――Lexico-Syntax の姿勢から――」（『日本語教育』四七）
⑳ 参考文献(1)、八四頁～八五頁。
㉑ 擬態語の認定には、天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』（東京堂出版）ならびに浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』（角川小辞典12）を参照した。また両辞典の中からも用例の採集を行ったが、シテイク形式のものは見られなかった。
㉒ 参考文献(13)、三七頁。
㉓ 柴田武編『ことばの意味1』（平凡社選書47）一四頁～二三頁。
㉔ 『あゆひ抄』巻五『由久身』の項に「詞のうへに〈したい〉〈〉とくはへて心うへし」という記載が見える。
㉕ 参考文献(12)。

参考文献

(1) 森田良行（一九六八a）「『行く・来る』の用法（『国語学』七五）。
(2) 森田良行（一九六八b）「動作・状態を表すいい方」（『講座日本語教育』第四分冊）。
(3) 高橋太郎（一九六九）「すがたともくろみ」（『日本語動詞のアスペクト』一九七六・むぎ書房　所収）。
(4) 吉田金彦（一九七一）『現代語助動詞の史的研究』明治書院。
(5) 吉川武時（一九七一）「現代日本語動詞のアスペクトの研究」（『日本語動詞のアスペクト』一九七六・むぎ書房　所収）。
(6) 鈴木重幸（一九七二）『日本語文法・形態論』むぎ書房。
(7) 吉田金彦（一九七三）『上代語助動詞の史的研究』明治書院。
(8) 三上勝夫（一九七五）「補助動詞『ゆく』『くる』の意味と用法（『北海道大学教育学部紀要』二五）。
(9) 鈴木康之（一九七七）『日本語文法の基礎』三省堂。
(10) 城田　俊（一九七八）「《いく・くる》について」（『北海道大学人文科学論集』一四）。
(11) 牧内　勝（一九七九）「テンス、アスペクトおよびムード『～ていく』と『～てくる』の文法」（『フェリス女学院大学紀要』一四）。
(12) 工藤真由美（一九八二）「シテイル形式の意味記述」（武蔵大学『人文学会雑誌』第一三巻第四号）。
(13) 仁田義雄（一九八二）「動詞の意味と構文――テンス・アンペクトをめぐって――」（『日本語学』第一巻第一号）。

例文出典

用例文の出典は以下の通りである。文庫本から用例を多く採集した。そのため各作品の発表年を先ず記し、最後にその文庫本の当該刷の出た年を示した。その他の教科書類等はその書名と発行年のみを示した。

（文庫本）

(1) 一九一五　芥川龍之介　羅生門　新潮文庫『羅生門・鼻』一九七八、二二刷。
(2) 一九一六　森鷗外　高瀬舟　新潮文庫『山椒大夫・高瀬舟』一九七六、一七刷。
(3) 一九一九　武者小路実篤　友情　新潮文庫一九七三、七一刷。
(4) 一九三七　川端康成　雪国　新潮文庫一九八一、九一刷。
(5) 一九四七　太宰治　斜陽　新潮文庫一九七五、五七刷。
(6) 一九五七　井上靖　天平の甍　新潮文庫一九八〇、四一刷。
(7) 一九五八　有吉佐和子　人形浄瑠璃　新潮文庫『地唄』一九八〇、二〇刷。
(8) 一九六一　有吉佐和子　墨　新潮文庫『地唄』一九八〇、二〇刷。
(9) 一九六二　川端康成　古都　新潮文庫一九八〇、三六刷。
(10) 一九六六　石川達三　金環蝕　新潮文庫一九八〇、二〇刷。
(11) 一九六八　石川達三　青春の蹉跌　新潮文庫一九七八、三四刷。
(12) 一九七八　森村誠一　野性の証明　角川文庫一九七八、初版。
(13) 一九八〇　立間祥介訳　駱駝祥子――らくだのシアンツ――　岩波文庫一九八〇、一刷。

（その他）

(14) 『新訂新しい社会・六年、上』（東京書籍　一九七〇）。
(15) 加藤周一『日本文学史序説、上』（筑摩書房　一九七五）。
(16) 『集英社版　世界文学全集72、狂人日記／阿Q正伝／寒い夜他』（集英社　一九七八）。
(17) 『北京の伝説』（角川選書96　一九七八）。

(18)『定本小川未明小説全集1小説集Ⅰ』(講談社　一九七九)。
(19)『日本事情シリーズ　京都・大阪とその周辺――近畿地方――』(凡人社　一九八四)。
(20)『月刊国語教育』(東京法令出版　一九八四　一一月号)。
(21)『科学と人間』(日本放送出版協会　一九八六)。
(22)『詳説日本史(改訂版)』(山川出版社　一九八六)。
なお『萬葉集』からの引例は日本古典文学全集(小学館)による。

第28号　要目

(昭和61年12月刊)

『源氏物語』にみる〝物語の論理〟……松田　薫
――女三宮造型の意義をめぐって――
小名狂言における〈とりなし〉の方法……稲田秀雄
「菊花の約」考……李　国勝
横光利一「上海」……小川直美
――吉行エイスケとの比較において――
谷崎潤一郎「少将滋幹の母」論……風呂本　薫
――新聞連載における小説形式――